

セッティングを工夫したことで着衣動作が可能となった症例 一生き甲斐を取り戻すために

施設名 美原記念病院

氏名 安藤杏子

Key Word : 更衣, 高次脳機能障害, 精神機能

【はじめに】

症例の生き甲斐は、自ら選定した外出着（以下上着）を羽織り、外出をすることである。しかし、てんかん発作、脳梗塞再発により高次脳機能障害が悪化し、着衣動作が困難となった。そこでセッティングを工夫し、着衣動作の獲得を図ったため以下に報告する。

【事例紹介】

70歳代女性。X年Y月Z日、症候性てんかんで当院一般病棟入院。Y月Z+10日、脳梗塞発症し左片麻痺、構成障害、左半側空間無視・注意障害の悪化あり。その後、回復期リハビリ病棟に転棟。既往に脳梗塞、脳出血、痙攣発作があるが、次女と2人暮らしでADL自立。週3回程度外出し、その際は自ら選定した上着を羽織り、着飾っていた。hopeは「今まで通り着飾って外出したい」である。

【作業療法評価】

JCS1、軽度左片麻痺、全指対立摘み可能。軽度認知機能低下あり。構成障害、左半側空間無視、選択性の注意機能低下を認め、病棟内歩行はフリーハンドで監視を要した。FIM86点、更衣4点。脱衣は可能。上着の着衣では、違う袖に上肢を通す様子あり。畳まれた上着では、着衣時に形状が崩れると袖ぐりを見つけれられない、袖の左右の間違い、ボタンの掛け違いあり。着衣が困難なことから「何も出来なくなって悲しい」と発言あり。しかし、予め衣服を広げ、形状を整えた状態であれば、前後や各部位の判別は可能。

【問題点】

高次脳機能障害により、衣服の形状が崩れると袖ぐりを探索できず、上着の部位の識別が困難となる。そのため、上着の着衣動作に介助を要し、精神的な落ち込みがみられる。

【目標】

退院後、好みの上着を自分で選定し、着衣動作が可能となる。

【治療プログラム】

着衣の実動作訓練で、上着のセッティング方法や着衣方法を検討する。また、家族指導を実施することで退院後の生活に繋げる。

【介入経過】

介入当初は、自己教示法や模倣動作を実施するも着衣困難であった。症例は予め広げて形状を整えた上着であれば、各部位の判別が可能であり、後身頃を上面にすれば左右の判別が可能である。この利点をいかしてセッティングを変更した。後身頃を上面に置き、羽織ってから両上肢を通す方法にしたことで着衣可能となった。更に、退院後の生活を見据え、選定を含めた一連動作の獲得が必要であるため、形状が整いやすく、上記セッティングを再現しやすい外的補助具としてハンガーを使用した。ハンガーを使用した着衣動作では、自身でハンガーを回転させ、上記手順で着衣可能であった。家族にも、同設定で遂行できるよう情報提供をした。

【最終評価】(Z+59日)

高次脳機能障害の著明な改善はなし。FIM96点、更衣5点。上着をハンガーに掛けておくことで、ハンガーを回転させ、後身頃を手前にして羽織り、両上肢を通す方法で着衣可能。「着替えられるようになってほっとした、安心した」と発言あり。

【考察】

着衣動作では、身体と衣服の相対する位置関係の理解や着衣手順をイメージし適切に遂行する¹⁾要素が求められる。この点について、症例は高次脳機能障害により、形状の崩れた上着では各部位や左右の判別が困難であり、着衣動作に介助を要していた。しかし、形状の整った上着であれば、各部位の判別は可能であり、前後を調整することで左右の判別が可能であった。この利点をいかし、着衣動作前のセッティングが重要と考え、アプローチを行なった。上着の形状を整え、衣服の位置関係を明確にし、左右の判別がしやすいように後身頃を上面に置いた。このセッティングにより、着衣動作を容易にしたことが着衣動作の獲得に繋がった。また、症例のhopeは、自ら上着を選定し着飾ることであり、上着を選べる環境をつくるために前後が理解しやすく形状が整いやすいハンガーを利用した。着飾ることを生き甲斐としていた症例にとって、上着を選定できることは重要であり、症例のhopeと合致した環境設定であったと考える。

【参考文献】

- 1) 松井義也ら：着衣障害を呈した症例への作業療法，作業療法，2014，33，172－180